

滋賀県文化審議会第 18 回会議概要

- 1 日 時 平成 29 年 8 月 2 日（木）10:00～12:00
- 2 場 所 滋賀県庁本館第 5 委員会室
- 3 出席者 委 員：中川委員（会長）、辻委員（会長代理）、東委員、伊熊委員、
川戸委員、杉江委員、田端委員、寺嶋委員、殿村委員、
富永委員、平松委員、三田村委員、南委員（13 名出席）
事務局：県民生活部福永部長、文化振興課田島課長、田村新生美術館
整備室長、小林参事、野瀬課長補佐ほか

4 議 題

- (1) 文化の振興について
- (2) 新生美術館の設計概要および 休館中の活動について
- (3) その他
- ア 文化芸術振興基本法の一部改正について
- イ 県の財政収支見通しについて

5 概要

(1) 文化の振興について

- たくさんの事業が滋賀県内で行われていることはわかるが、伝わりにくい。
情報発信のために、全体が一目でわかるようなウェブサイト等を整備してはどうか。
- 地域の色々な文化財やお祭、民俗芸能があるが、実際どんなことをやっているのか、動画も何もないので、少し理解しにくいと思う。ホームページやサーバーで、一定の動画等があれば、県民ももう少し理解ができると思う。
- 日本遺産への登録以降、白鬚神社へ来る人が増えている。登録が増加の原因とは言えないかもしれないが、認知度向上へつながっているのではないかな。
- 2020 年に向けての文化プログラムは、とくに子どもが参加できる仕組みを作ってもらいたい。
- アートマネジメントは、各文化施設の連携が必要。育成や研修の場を提供するとともに、活躍の場も提供していくべき。
- ホールの子事業について、生の舞台を観ることは、映像を観るより感動が得られる。もう少し回数を増やしてほしい。将来の文化の担い手の育成のひとつのきっかけになる。
- ホールの子事業の後のフィードバックや音楽の授業の中にうまく組み込めるよう学校現場と連携して、モデルカリキュラムとしての発展を。

- 琵琶湖全域で行われている、「琵琶湖とその水辺景観」の発信がモデルケースとして文化の発信にも使えるのではないかな。
- 県内での文化活動の拠点不足が課題である。廃校になった小学校を芸術・文化の拠点として使用できるように、県から方針を打ち出してほしい。
- 市町・県立図書館でおこなっている読み聞かせボランティアの育成についても文化活動の中に組み入れて欲しい。

(2) 新生美術館の設計概要および休館中の活動について

- 富山県立近代美術館は、10月のグランドオープンの前に一部をオープンしている。そのようなやり方は県民へのアピールの機会になるので、取り入れてはどうか。陶芸の森などとタイアップしてアピールしていくのも大事ではないかな。
- 10月に日本橋にできる「ここ滋賀」を美術館の発信や宣伝に使ってほしい。
- 新生美術館への子どもの来館を増やすために、子ども招待の日などを検討してはどうか。
- 美術館の移動展示を県外でも開催してはどうか。

(3) その他

ア) 文化芸術振興基本法の一部改正について

- 障害福祉の関係者にも文化の重要性が認識され、いろいろな計画等に取り入れられてきている。滋賀県の取組は国より先行しており、効果としてつながってきている。

イ) 県の財政収支見通しについて

- 文化は、まず儲けないと何もできない。滋賀県には世界に発信できるコンテンツがあるので、文化の力で儲ける仕組みを考えてみるべき。

(4) 会長総括

- 滋賀県の文化振興基本方針は先進的。文化政策は義務ではないが、文化条例や文化振興基本方針に早くから取り組んだ。基本方針どおりに施策が進んでいるか確認することが必要。
- 部局間の連携、分野をクロスオーバーして施策に取り組む必要がある。
- 厳しい財政状況を切り抜けるには、次世代の育成、文化を未来への投資であることを共通認識することが重要。また、観光とつながっている文化財については、県の政策担当、企業や事業者との間で意思疎通し、文化政策を考えることが重要。